バングラデシュ南部避難民救援事業　ERU 第 6 班

活動期間：2018 年 3 月 18 日～4 月 24 日
報告者：看護師　二星　智恵子

2017 年 8 月以降、ミャンマー・ラカイン州での暴力から 70 万以上もの人が避難しているバングラデシュ。日本赤十字社はバングラデシュ赤新月社の医療活動を支援するため、2017 年 9 月から、医師・看護師・事務職員などの緊急医療チームのバングラデシュへの派遣を開始しました。

私が派遣された 2018 年 3 月は日赤の最初の ERU の派遣から半年が過ぎ、緊急的な支援の段階から、先を見据えた中・長期的な支援へのシフトチェンジの時期でした。私たちが訪れた時には避難民キャンプ内は暴動が起こったりすることなく、状況は落ち着いているように見えました。ミャンマーへの帰還も計画されていると耳にしましたが、実際には状況は滞っているようでした。私にとって ERU での活動は初めてでした。ましてや難民キャンプ、というものを見たこともどんなところかも想像もついていませんでした。

ERU 第 6 班として、保健医療活動の継続、地域住民対象の保健活動の開始、モンスーン・サイクロン対策などの活動を行いました。私は看護師として、地域住民対象の保健活動の計画立案と救急法の普及に取り組みました。救急法を避難民に普及するため、まずは日赤でボランティアをしてくれている避難民の方々に救急法講習を受けてもらいました。そしてその方々が講師となり、避難民の方々へ講習を行ってもらいました。講師の避難民の方々は皆聡明で、熱心に救急法を覚えてくれました。自国では国際 NGO で働いていた人、教師として働いていた人など背景はさまざまです。自国を追われて、住む場所も選べず、働く事もできない環境とはどのようなものなのでしょうか。想像もつきません。それでも前を向いて進もうとする避難民の方々に心打たれたのでした。